

第 46 回大日本耳鼻咽喉科中國地方會記事

場 所 岡山醫科大學第 1 講堂

時 日 昭和 16 年 2 月 23 日

守 屋 誠 編

1. 舌根甲狀腺腫に就て

鈴 木 勇 夫 君

咽頭異物感を主訴とし來りたる 22 歳男子に於て舌根部正中線正に直徑約 3 cm なる半球狀に隆起し基底廣く、周圍と明瞭に境界され表面血管擴張を見たる弾力性硬なる腫瘍あるを認め之が組織的検査により甲狀腺組織なるを認め、尙頭部切開により固有甲狀腺を全く缺如せるを確知し、茲に該腫瘍の一部を残し大部分を切除の目的にて寒蹄係を用ひて成功せるを述べ、甲狀腺組織の舌根部に存するは特に稀とするには足らざるも其の固有甲狀腺を缺如し、而も之がかかる位置に存在しありたるは甚だ稀にして本例の如きものあるが故に斯るものに際しては其の術後に於ける脱落症状あるを考慮し本例に於て行ひたる如く正確に固有甲狀腺組織の存在を豫め詳査し置くを要すと述べたり。

2. 人體歐氏管筋に就て

岡 田 要 君

人體の歐氏管筋たる口蓋張筋、口蓋舉筋、歐氏管咽頭筋の 3 筋の内、歐氏管咽頭筋は小且、不定なる筋肉なるにより之を暫く置き、主要筋たる前 2 者に就て演者は之が老人性變化に着目し從來之等の年齢的變化に關する研究無きに鑑み、11 歳より 84 歳に至る迄の 15 の人屍體より得たる右側歐氏管筋の組織的検査を行ひ、尙之に加ふるに莖狀舌筋、莖狀咽頭筋並に莖狀舌骨筋の組織検査成績を以て之と比較對照し考究せり、而して其の方法は抽出各筋を關氏「メチル」アルコール・チエロイヂ

ン」法により包埋し、切片染色には主として筋纖維に對し鐵「ヘマトキシリン」法を、彈力纖維に對し「レゾルチン・フクシン」法を、一般結締織に對し Azan 法を用ひ、Planimeter を使用して筋纖維横斷面積を測定せり。かくて次の如き検査成績を得たり。兩筋に於て年齢の増加と共に主として 1) 筋纖維數。2) 筋纖維の形狀。3) 筋纖維の平均横斷面積。4) 筋纖維間結締織等に於て著明なる變化の露はるるを認めたり。即ち 2 筋は共に筋纖維の數は幼若なるもの程多く、年齢の増加に従ひ漸次減少す。2) 筋纖維の形狀は兩筋共に幼若なるものに於ては多くは多角形にして略ぼ同大なるものよりなるに對し、老齡のものにては類圓形にして其の大小極めて不同なり。3) 筋纖維の平均横斷面積は兩筋共に、幼若なるものより年齢の増加と共に増大し、39 歳のものに至つて最高に達し夫れより漸次減少して老齡に至る。但し口蓋舉筋に於ては 39 歳以後に於ける筋纖維横斷面積が略ぼ規則正しく低下するに對し、口蓋張筋に於ては可成不規則に増減しつつ低下す。4) 筋纖維間結締織は兩筋共に年齢の増加と共に増大するも、口蓋舉筋に於て其の度大なり。尙之等歐氏管筋の所見特に筋纖維の平均横斷面積の増減に關して、之を莖狀舌筋、莖狀咽頭筋並に莖狀舌骨筋の老人性變化と比較するに、歐氏管筋に於て其の變化の度著明なるを認め得て演者は歐氏管筋は他の諸筋に比して速かに老人性萎縮を來たすものなるを考察せり。而して最後に演者は之等歐氏管筋の諸變化所見よりして其の機能を考究し應等に就ての臨牀的意義に言及せり。

3. 「ズルフォンアミツド劑」中毒に就て

土居 清君

第1例 慢性淋疾の自家的治療の目的にてひそかに「ズルフォンアミツド劑」の大量を約2箇月間服用し、其の中毒に因り顆粒細胞減少症を來せるものと思はれるものにして其の後診療せる醫師により更に「ズルフォンアミツド劑」の注射を受け、爲に症状一層重篤となり來りたるものにて本例は死亡せり。

第2例 中耳炎自宅治療の目的にて醫師の指導なく「プロントジル錠劑」1日3g宛引續き合計63g服用せし所強度なる貧血を來せる爲演者の外來に來り血液像検査に依り白血球及び顆粒細胞の減少せるを知り直ちに該藥劑使用を禁じ輸血4回を行ひて程無く恢復せり。

第3例 左側乳嘴竇開放術後創丹毒にて、其の治療の爲血液像に注意しつつ「ズルフォンアミツド劑」の衝擊療法をなし、「プロントジル」注射36本、「アルベジル」内服21gに及びたる時、白血球及び顆粒細胞の減少を示せるを以て直ちに藥劑の中止により事無きを得、且丹毒治療の目的も充分達し得たり。演者は斯る3例より最近「ズルフォンアミツド劑」の効果の漸く認められ、大方の醫家により奨用さるるに到りたるも該藥劑は其の裏面に於ては又少からざる危険を伴ひ居るものなれば之が使用には充分に注意を要し特に其の血液像は常に注意怠る可からざるを述べ。

追加(1)

細見 英君

近來藥店の宣傳も手傳つてか單に醫師のみならず素人も無統制に之が濫用さるる傾向を有して來た、従つて之等中毒の報告も亦多きを加へるに到つた。吾人は連菌、淋菌性炎症に際しては無闇に之等藥劑の使用は慎まねばならぬ。大體1週間も連用したる後は一時中斷し他の藥劑と換へる等して中毒の防止を心掛ける可きであらうと思ふ。

追加(2)

守屋 誠君

私は50歳婦人に來つた耳性竇血栓で2週間來惡寒戰慄あり、敗血症性熱型を呈し、貧血黃疸を有する重態なるため來院せしものに、入院直後急に強度なる頭痛、嘔吐を來し、一時腦膜炎の發來を疑ひたるも、10日來醫師の監督の下に「ズルフォンアミツド劑」1日6錠宛連用せしを知り、之等藥劑使用を中止したるに、頭痛、嘔吐は2日にして治まり、ついで乳嘴蜂窠、頸靜脈の處置により治療したるを経験したるが、斯くの如く「ズルフォンアミツド劑」により、思はぬ症状を起し夫れが偶々腦膜炎を疑はしむる如き前後の病症状態にあつた事は偶然とは云へ注目す可き事、之等藥劑中毒により一時たりとも重篤なる疾患と誤認せられ診断を迷はしめらるることあるは注目す可き事と思ふ。

4. 中耳炎に對するレントゲン深部治療の經驗

登坂 清君

演者は20例の患者に就きレントゲン照射療法を行ひ之が成績を報告せり。内急性中耳炎12例の中、乳嘴突起炎發來せしもの9例、其の中効果を確認し得たるもの双球菌性2例、連鎖狀球菌性3例、結核菌性1例にして之等は既に1回の照射にて著效を見たり。單なる急性中耳炎3例中連鎖狀球菌性のも1例は有效なりき。幼兒亞急性遷延性のも2例中、1例は3回照射にて效果を見、慢性中耳炎6例中、中心性穿孔あるもの3例に就ては内2例に有效、上鼓室炎あるもの3例中2例は膿汁減少を見たり。かくて演者は中耳炎に對するレントゲン效果に就て總括論及し、特に急性中耳炎に於て其の發病後の日數に就ては早きを良しとし、年齢と治療効果は成人、幼兒共に同率なる等を圖表を以て示し、レントゲン效果は一般中耳炎に有效なるものあり、特に急性中耳炎に於て然りと結論せり。

5. 耳根治手術後治療中に發來し腦膜炎
を思はしめたる「ヒステリー發作」の
1例

松原久之君

24歳の女子、耳根治手術の翌日迷路壓迫症あり。「タンボン」除去により直ちに輕快し其の後經過順調なりしが、手術1箇月後激甚なる頭痛、眩暈、羞明、惡心、嘔吐等の諸症狀に加ふるに上肢の痙攣を來し、宛も腦膜炎末期症狀を呈せり。然れども項強直、ケルニヒ氏症候、腦壓上昇等は認め得ず。暗示療法により數日間に快癒し、諸検査の結果「ヒステリー發作」なりしを明かにせり。

本症例に於て演者は耳根治手術後の迷路壓迫症狀として現はれたる眩暈、惡心等の經驗に基く潜在性觀念が後治療の激烈なる苦痛を外因として、此苦痛を免れんとする潜在性願望を意識下に置いて再び眩暈、惡心、嘔吐、痙攣等の「ヒステリー症候」を起せしものと思维すと報じたり。

追 加

瀧口一雄君

類似症例を追加す。

6. 先天性聾の病理に關する實驗的研究

原 半三郎君

先天性聾の成因に關しては、從來遺傳と見做されたる症例の多數報告されたる處なるも、又一方に於て之が眞の遺傳に非ずして、胎兒の子宮内發育中に其の因を發し、爲に先天性聾を招來し得ん事も亦想像に難からざる處なり、然りと雖も之に關する實驗的研究は極めて乏しく、其の知見も又明かならず。此處に於て、演者は本問題を究明せんとし、次の如き實驗を試み、其の成因の一端を述べたり、即ち妊娠海猿に「ヘノボジ油」を注射し、夫れより生れたる仔獸の夫等と比較せり、其の結果母、仔獸共に種々の程度の聽力障礙を來し、殊

に仔獸にても一部に於ては全く聾なりしものを得たり、其の組織所見に於てはコルチ器に於て最も著明なる變性所見を認めたり、即ち海猿にては、其の母體の藥劑中毒に因り其の仔獸に先天性、非遺傳性聾を招來し得るものにして、此事實は一部先天性聾の成因に關し重大なる示唆を與ふるものと信ず。

7. 兩側性潜在性扁桃腺周圍膿瘍の2例

原 半三郎君

何れも30歳の女性、兩例共に度々扁桃腺炎に罹り居るが第1例は約10日前より、第2例は2日前より惡寒戰慄を伴ひて發熱、弛張性熱型を呈し、2例共に兩側扁桃腺強度に發赤腫脹し居るも、其の周圍は扁桃腺周圍膿瘍を思はしむる如き腫脹發赤無く兩側共に注意して試験穿刺を行ひたるも成功せず、唯膿窩性扁桃腺炎に見る局所症狀を呈し居たるが共に腔内及び側頸部よりの壓痛は特に著しくして注意す可く、夜間自發痛甚しき爲に進んで入院を希望する程なりき。かかる2例に對し演者は合併症の發來を考慮し進んで兩側扁桃摘を行ひたるに以外にも兩例兩側共に其の下極に於て膿瘍を認め之が排膿せしに術後の經過良好にして全治せり、かかる例よりかかる兩側にしかも同時に膿瘍のある事は稀にして而も之が手術により始めて發見されたるが如き潜在性なりしは注意す可きとなし、かかるものこそ急性炎症期に於ける扁桃摘の理想的適應症なりとし、從來單に急性扁桃腺炎或は扁桃腺性敗血症等として看過されたるものの内或は本例の如く潜在性周圍膿瘍に因るものあり、或は之より重篤なる合併症を惹起せしものありたらんを思ひ、唯本症に於ては口腔内側頸部に於ける壓痛及び自發痛の特に著明なるは診斷上注意す可きとなしたり。

8. 1昨年7月より昨年12月迄に行ひし 11例の喉頭全摘出例に於ける觀察

小田大吉君
(演) 岡田要君

演者等は1昨年7月より昨年12月迄に、クロー氏喉頭全摘出術により處置したる11例の喉頭摘患者に就て觀察せる所を述べ、即ちクローの手術は簡單なる皮膚切開のみにて其の他の總て健康組織特に筋肉等に加ふる操作を極端に制限さる事よりして治癒期間の極めて早きを特徴とすとなし演者等の症例中にも術後6日目より流動食を、8日目より軟食を攝り得たものもあるを例示し、又次に症例中にはクローの手術適示時期を逸したるもの例へば腫瘍の聲門部より下方氣管、第3輪に及びたるもの、或は1側の甲状軟骨を破り同側の甲状腺と癒着したるもの等もあり、之等をも本術式により摘出し得たるを指摘し、本手術の適應に些か優點あるを述べ其の他本術式は軟骨膜下に喉頭摘出を行ふ事より「オリエンテイルング」も容易、出血も少にして従來の術式に比し患者に與へる苦痛の少きを述べて本法を推奨せり。

追加(1)

小田大吉君

頸部正中線に於ける皮膚切開によつて喉頭を摘出しやうと云ふことは、喉頭摘出の始められた頃ビルロート、マース、シュミット等によつて試みられ、其の後喉頭側方の處置に不便だと云ふので放擲され、ウンゲンベック、グルツク、セーレンセン等の皮膚切開に代へられたものである。併しながら手術室に就て所謂喉頭の「スケレットテイルング」に関する記載をよく読んで見ますと喉頭を周圍より離断するに當つて筋肉の附着部を頸骨膜外に於て切斷して喉頭を遊離せしめて之を「スケレシテイルング」と云つて居る様であります。之によれば喉頭側部の分離殊に下咽頭括約筋等の處理は難かしく斯様な「スケレットテイルング」を用

ふる以上は正中線切開をもつては喉頭を遊離せしめることは困難である。クローの方法は軟骨膜下に於て喉頭を周圍より遊離せしむるのであり、之によれば總ての部位の「オリエンテイルング」は非常に容易となり正中線皮膚切開のみをもつて充分喉頭を處置することが出來た。尙之等の11例内にはクロー教授自身手術適示とされて居る例(内瘻又は喉頭軟骨内に止まれるもの、轉移なきもの)を遙に越して居るものが少くないが、總てこの皮膚切開で自由に處置することが出來た。この術式は組織に對する侵襲が少い點に於て従來のものに比して利點があり、其の應用可能の範圍もクロー教授自身適示とさるる例より廣きことを經驗せるを以て、中間報告の意味に於て報告せり。

追加(2)

細見英君

演者の報告されたる症例中1例は實に余の小田教授に照會したるものである。術前に於て惡疫質強度にて栄養も悪く、一時症狀は憂慮さるる状態であつたのであるが、手術後通院した時に診たる所、實に術前とまるで症狀の好轉せるに驚いたのである。大いに症例を増加し、此種疾患に貢獻の加はられん事を望みます。

9. 腦炎患者の聽器組織標本供覽

小田大吉君
(演) 上塚万壽男君

昭和16年度に於て岡山醫科大學北山内科及び稲田内科に收容され不幸死の轉歸を取りたる日本夏期腦炎患者7例の2箇の側頭骨を死後1時間50分乃至4時間15分に摘出固定し、其の聽器の組織的檢索を行ひたり。

之等症例は何れも臨牀的並に病理解剖的に定型的且、重篤なる日本夏期腦炎にして年齢は30歳より70歳、發病後多くは5-6病日に死亡したるものなりき。各例を通じて特異なる點は内聽道蜘蛛

膜下腔に多數の組織球及び淋巴球の出現を認め、之は細網織内皮系統の活動を考ふ可き所見なり。神經自身の變化として3例に於て前庭神經節、細胞體の膨化、被膜細胞の増殖認められたるが、其の内1例に於ては前庭神經節膨化が特に著しく、一部の萎縮したる細胞體の周圍には「グリヤ」纏絡を認めたるのみならず右側第2回轉螺旋神經節の細胞は殆ど脱落し、一部にNeuronohagieの像を認めたり。斯る變化は腦炎に見る脊髓神經節の變化に酷似せり。其の他神經纖維、神經終末には輕微なる死後變化と認む可きもの以外には何等の變化をも認めざりき。演者は尙最後に文獻上腦炎に關する臨牀的記載を省み、本檢案所見の注意す可きことを述べたり。

質問

笠井 經 夫君

生前に聽力検査をされたか。

應答

小田 大 吉君

之等の症例は何れも重症にして意識濁濁せしを以て聽力障害の有無は確めることが出来なかつた。元來腦炎に於ては聽力障害を貽すことは少く且、之等の例で蝸牛殼神經に見られた變化は64歳の1例の1側の第2回轉の一部に上塚君の述べた様な變化があつたのみであつてこの例が幸にして治癒したとしても聽力障害をのこしたかどうか疑問である。我々がこの組織標本を供覽せる所以のものは腦炎の際の聽器の組織的所見をしたものはかつて無く、且又機能障害との關係は別として聽神經組織に豫想以上著明なる腦炎に關する所見を認めたからである。

追加

笠井 經 夫君

余は大正13年夏期腦炎の流行した時内科の依頼にて該患者30例に就て生前に於ける聽力障害

等の有無を検査したが其の際は臨牀上聽力の障礙と思はれるものを見なかつた。

10. 咽喉頭湯傷に就て

守屋 誠君

演者は昭和13年より本年(16年)2月現在)まで演者等の教室に於て取扱ひたる此種患者9例に對して調査し、其の内輕症なるもの6例は咽喉痛を主訴とし來院するに相當時間を経過し居り、斯るものは呼吸障害は少く氣管切開を行はずして治癒し、死亡したる2例及び氣管切開を施して辛じて治癒したる2例は咽喉痛よりも寧ろ呼吸障害を主訴として比較的早期に來院せしを觀察し、尙後4者は悉く其の咽喉後壁に白苔其の他比較的高度の粘膜炎變化を認め、之は細口より液體を吸引嚥下する場合の咽喉に於ける生理的機構に依る結果なりとなし、之が説明を行ひ咽喉後壁に於ける之等粘膜炎變化の有無が氣管切開決定に際しての幾分の參考條件となり得るならんと述べ、次に尙斯る湯傷にて死亡せる2例は特に驚く可き急激なる進行を示しざるものにして此種重篤なる咽喉頭湯傷の恐る可きを注意し早期氣管切開の必要を重ねて強調し、早期に醫門を訪ね多少とも呼吸障害を有し、特に咽喉後壁に白苔等粘膜炎の變化を有する如き小兒湯傷に對しては、たとへ夫れが現在に於て比較的輕症と思はるるも、やがては急激なる呼吸困難を起す事多きが故に進んで速座に氣管切開を行ふ可きものならんと結論せり。

追加

笠井 經 夫君

余は6歳位の小兒にして熱湯誤嚥後約4時間經過せるものに直ちに氣管切開を行ひたるも呼吸障害は少しも輕快せず翌日死亡したる1例及び他に氣管切開を施さずして呼吸困難も漸次恢復せる1例を経験したるにより追加す。

結 言

守 屋 誠 君

咽喉湯傷後の呼吸困難による死因は種々考へられ居る所であつて、笠井博士の第1例は恐らくは熱湯吸入による肺病變による死因に屬するものと考へるを妥當と思ふ。恐らく其の際は咽頭後壁は既に粘膜炎化が見られたものと考へる。

11. 臨牀瑣談

守 屋 誠 君

1) 扁桃腺摘出により輕快せし「アレルギー様」疾患2例

5歳の男兒にて毎冬定りて元氣なく咳嗽頻發し時に夜間に於ては發作性咳嗽の爲、呼吸困難を起す事もありたり。之に兩側口蓋扁桃腺摘出及び咽頭扁桃腺切除を行ひたるに其の發作を全く見ざるに至りたるもの。

9歳の男兒にて毎夜就床後數分にして清澄なる粘液兩鼻より流出し噴口頻發し鼻閉塞を來し之が30分程續きて止む。斯るものに於て兩側口蓋扁桃腺肥大ありたるを摘出したるに漸次發作輕度となり1週間に於て發作絶無となりたり。この2例に就て演者は本例は共に眞の「アレルギー」なるや否やは確定し得ず又扁桃腺と「アレルギー」疾患との關係尙明かならざる今日、該扁桃腺摘出と之等兩症治癒との直接の因果關係は尙確證せられざるも兎も角も本兩例に於ては「アレルギー様」症狀扁桃腺摘出を契期として輕快せしは臨牀上興味ありとなし、之等の問題に關する文獻をも附加して考案演述せり。

2) 手術中偶然發見されし若年者に於ける早期上顎癌腫症の1例

21歳未婚の女子に於て慢性上顎竇蓄膿症なる診斷の下に和辻、デンケル氏上顎竇手術施行中偶然竇内粘膜炎に僅かなる腫瘍様變化あるを注意し直ちに全粘膜炎剝離後組織検査をなしたるに、明かに癌組織なりしを確認したる例に就き其の大様經過を述べ、上顎竇癌腫症は其の初期に於ては成書記載

の如く慢性上顎竇蓄膿症を伴ひ之が主症候となり居る事多きが故にたとへ若年者なりと雖も常に注意しあるを要し、少くとも異常變化ありたる粘膜炎は直に之を組織的に検査し、早期斷に勤むべきを本例により教へられたりとなしたり。

3) 耳角皮症の1例

51歳の男子、左耳翼に發生せる粉瘤腫を基礎とせる耳角皮症の1例を述べ耳翼に發生せるは稀なりとし其の原因に就て考案せり。

12. 聽神經腫瘍に就て

小 田 大 吉 君

演者の昨年中取り扱へる聽神經腫瘍手術例2例組織的に偶然發見せる小なる全腫瘍1例に就て報告した。

第1手術例. 47歳の女. 右側第8を中心し第5第7, 第9腦神經の障礙, 小腦右側の症狀, 聽血乳頭を有す. 右側聽神經腫瘍の診斷の下に後頭下に於て右項坦面より入つて小腦橋隅角に腫瘍を發見, 之を被膜内に於て摘出. 其の後一時輕快せしも再び増悪. よつて3週間後再手術, 再び殘存せる腫瘍を一部被膜と共に摘出. 再び輕快せしも其の後腦壓迫症狀進行して2箇月後死亡. 剖檢せしに内聽孔より前方, 橋腦の側方に腫瘍の殘存し, 之に壓せられて腦幹の屈曲せるを見たり. 手術直後の危険を慮り被膜内に處理せんとせしは腫瘍の前半を看過せる原因となりしものなり.

第2手術例. 31歳男. 左第8神經を中心として第5, 6, 7, 9及び10腦神經の障礙, 小腦左半の障礙, 交錯性半身知覺鈍麻あり. 左側聽神經腫瘍の診斷の下に後頭下に於て左坦面より入りて小腦橋隅角に腫瘍を發見, 之を被膜と共に摘出せり. 術後諸麻痺速かに去り治癒せり. 近々職業に復す.

13. 所謂分泌性中耳加答兒の中耳腔内陰壓の測定に就て (器械供覽)

高 原 滋 夫 君
谷 豊 君

所謂分泌性中耳加答兒に於て、中耳腔内の滲溜液發生の機轉に關して、中耳腔内の氣壓測定は重要な事なるに鑑み、演者等は之が實數値を得可き測定法を考案せり。本法は「氣體の體積は恒溫に於て其の壓力に反比例する」なる物理方則を應用し、極めて微量なる氣體（空氣を用ひたり）を極めて微細な硝子管内に封入し、其の先に注射針を附け、之を鼓膜を通じて中耳腔内に刺入し、該封入氣體の中耳腔内氣壓に反比例し變ずる體積の變化を讀取り、夫れより中耳腔陰壓を算出する方法なり、本法は理論上、中耳腔の容積の如何に拘らず其の中の陰壓度を、其の陰壓度の1%内外の誤差をもつて測定し得るものなるが尙之が性能を検定せんが爲に容積1ccの中耳腔模型を作製し、之が實壓と測定壓と略ぼ一致するを述べ、之が實驗を供覽せり。而して之を應用し測定したる20例の症例の中耳腔陰壓の數値に就て報告し、今迄の所、最高陰壓例は31mm水銀柱、最小は1.9mm水銀柱にして31—20mm水銀柱陰壓例は3例、20—10mm水銀柱陰壓例は9例、10—5mm水銀柱陰壓例は7例、5mm水銀柱陰壓以下は1例なりき、と述べ、尙今後之を用ひて所謂分泌性中耳加答兒に關する知見の廣大すべきを豫測せり。

追 加

田 中 文 男 君

實際上興味あるものと思ふ。

14. 臨牀瑣談

細 見 英 君

1) 「ズルファピリヂン劑」應用による「ムコーズ中耳炎」治癒2例

第1例 67歳患者にて10年前手術を受け治癒に1箇年を要したる耳に、再び中耳炎を再發、鼓膜穿孔にて得たる膿汁に定型的なる「ムコーズ菌」を證明せしものに「トリアノン」を1週間總計14g使用し治癒せるもの。

第2例 32歳男子患者にて乳嘴突起炎手術を當然行ふ可き諸症を呈せる、比較的進行せる定型的「ムコーズ中耳炎」に、患者の手術を嫌ふままに「トリアノン」1日2g内服せしめたるに3日目より好轉し始め、後「アデブロン」をも併用し、計9日間に「トリアノン」16g「アデブロン」3本を用ひて耳疾は全治したるが、11日目より發熱、全身發疹症狀にて強度の副作用に襲はれたる1例を報告し、「スルファピリヂン劑」の「ムコーズ中耳炎」に一應は効果を認め得るものなるを報じ尙第2例の如く、時に副作用の出現は注意す可きを述べたり。

追 加 (1)

守 屋 誠 君

余は31歳男子に來りたる慢性的に漸次惡化し、遂に定型的なる乳嘴突起炎を惹起し、耳後部の瀰漫性腫脹壓痛骨部外聽道の沈下偏頭痛等、當然手術の適應症と認められ、尙耳漏よりは細菌學教室に於て明かに「ムコーズ菌」を確認培養せられたる「ムコーズ中耳炎」に就き、手術を極度に嫌避するにより、「アデブロン療法」を試み良果を得た其の治療中に於ける骨部の變遷、聽能の恢復状態を追日X線寫眞撮影及び2日おきに「オーチオメトリー」を行ひて検査し、藥劑の使用と共に良好に向ふ狀を具さに觀察し、本例に於ては明かに「ズルファピリヂン」の効果を認めたる所なるが御参考のため其の寫眞及び「オーチオグラム」を供覽しやう。(供覽)

追 加 (2)

田 中 文 男 君

「ズルファミッド劑」は、中耳炎、乳嘴突起炎には著效あることは事實と思ふも、中には效果よりも寧ろ副作用に不快なるものもあり、殊に患者が醫を轉々する場合に、症狀を迷はず時さへある。來院時腦膜炎症狀を呈して居り之が前醫によりて

使用されたる「ズ劑」の中毒症状なりし事があつた。余は他の醫師の治療を受けつつありたる患者に對しては「ズ劑中毒」によるものにあらざるや一應確かめることとして居る。

追加 (3)

西村伊勢松君

「ムコーズ中耳炎」の「ズルファピリチン療法」に關して細見君の貴重なる2例の御報告に敬意を表す。余も其の中毒に對しては最初より非常に恐れて居るものであるが、唯食欲減退の點に就き或患者に於て、食欲減退後1日位與藥を中止し、再び多少減量しつつ用ふれば食欲減弱なしに續けて使用し得る場合のある事を經驗した。尙先回の當地方會にて述べた事であるが本療法中多くの場合1週間又は10日位で「ムコーズ菌」に變化、例へば菌體の染色不同、不良又は被膜の染色不良等を現はすものなるにより此點を注意しながら藥劑の減量を行ふ事は大切な事にあらざるかと思ふ。

2) 咽頭異物有無判定に就ての卑見

魚骨其他異物の咽頭に刺入せられし時に來る疼痛は比較的深部まで刺傷されある故に粘膜表面に「コカイン」塗布のみにては疼痛去らず、之に反し魚骨刺入後脱落せし後に來る疼痛は粘膜表面に近き部にのみ存する創面より來るが故に「コカイン」塗布にて疼痛は大體消失するものなる事より之を用ひて魚骨等異物の咽頭内に現在存在せるや否やの診斷を大略決定し得べきを述べ、尙患者の訴へにて甲状軟骨中央部以下にありと云ふ場合は多くは食道なるを意味すと附加せり。

15. 徽毒性舌根扁桃腺炎の1例

宮本種美君

患者は60歳の女にして約3箇月前より右顎下部腫脹嚥下障礙發語障礙等を來し種々醫藥を受けしも、治癒せざりしものにて、右顎下部淋巴腺は

約雞卵大に硬く腫脹し、右舌根扁桃腺は約鳩卵大に腫大せるを診たり。潰瘍等は認めずして、各腺窩には白色の膿栓ありて一見腺窩性扁桃腺炎の如き觀を呈せしは、血液検査の結果徽毒性のものなるを知り驅微療法にて治癒せり。

16. 聾聾栓塞に因る聽力障礙に就ての1考案

山口治君

聾聾栓塞に粘着性のものが長期間鼓膜に密着し、其の機能を障礙せしと思はるる場合は、聾聾除去後假令種々治療を施すとも聽力障礙を長く殘遺することあり。本問題に關し演者の倉敷中央病院に於て三木は臨牀的觀察を、井上は實驗的研究を試みたるが演者は其の成績中、1. 聽力検査に於て低音聽取障礙を認めたるもの多數なれども、高音聽取障礙を認めたるもの尠しとせず。而して前者は聾聾除去後速かに聽力の恢復を見るも、後者に於ては聾聾に因る耳鳴のために聽力障礙を來せるもの以前は豫後の比較的不良なるものあり。(三木) 2. 幼若家兎(體重500g)の1側の外聽道内に黃蠟を氣密に且、鼓膜に密着する程度に挿入し9箇月間飼育後聽器の組織學的變化を検査し(井上) a. 耳内筋。鼓膜張筋は明かに萎縮を見るも、鐙筋は殆ど健全せり。 b. 小聽骨竝に其の關節。僅に1例に於て小聽骨竝に槌砧靭帶關節の萎縮を見たり。 c. 内耳竝に聽神經。兩者共變化を見ず。なる結果を得、鼓膜張筋の萎縮は特に注意を要すべく、同筋が高音聽取に關係あるは既に諸學者によりて證明せられたるに照し、聾聾栓塞に因り、長期間鼓膜の機能が障礙せられたる場合は高音聽取障礙も來す可能ありと思考さるる等の事項は特に興味ある事なりと述べたり。

追加

小田大吉君

余は多數の患者に對し精密なる聽力検査を行ひ

たるに、從來の考へとは少しく異り、傳音器管性難聴患者に於ても上蓋部の先に低下する事少からざるを知りたり。之に關しては後日報告豫定なるも茲に參考までに追加せり。

の、僅か2週間にて消退し治癒せる事實を述べ、此種疾患に對しては其の病型を考慮し、勿論手術的に進む可きものは其の方針に従ふ可きも、或物に對しては斯る藥劑効果も一應は考慮す可きを提唱し之等病型の判定に關しては尙研究の餘地ありとせり。

17. 臨牀瑣談

田 中 文 男 君

1) 慢性化膿性中耳炎の藥劑療法

急性化膿性中耳炎に對する「ズルファミツド劑」の俾效は時に副作用の危険あるは別として最早今日何人も疑ふの餘地無く適當に之を使用すれば可成の成績を得るを知る。而して慢性化膿性中耳炎に對しては局所的に處置し、間接原因を除く以外に藥劑として體質改造劑も亦必要とさるる所なるが、かかる藥劑に對して「カルチウム劑」等の經驗はあるも、今日尙多くの研究考案の少きを遺憾とす、とて演者は之が目的として「ヒモン」、還元鐵、亞硫酸の合劑(岡山醫大處方)を用ひ、3例に於ては半年乃至1年餘繼續せし慢性化膿性中耳炎耳漏

2) 老人性難聴に就て

從來老人性難聴は主として神經萎縮と考へられ居たるが、教室の陳君は鼓膜張筋にも變化を認め岡田君は歐氏管筋にも變性あるを確認し斯る神經以外の變調も亦老人性難聴の原因として考慮するに至りたり。而して演者は近頃老人性難聴として顧られざりし者に強度なる滲出性中耳加答兒あり之が歐氏管を「ブジー」を用ひて擴張し通氣し、喜ばるる事あるに注意し、84歳の男女各2名、74歳女1名に就ての實例を擧げ、頑固なる滲出性中耳加答兒も所謂老人性難聴の1原因として考慮して可ならんと述べたり。

當 日 出 席 者

細 見	森	高 原	志 水	麻 植
菽 口	谷	寺 島	山 末	原
小 坂	藏 本	長 尾	瀧 口	田 中
登 坂	池田(學生)	渡 邊	宮 本	掛 谷
松 原	古林(父子)	山 田	松 原	井 口
井上佑太郎(倉敷)	角 田	原田(輝雄)	三 宅	山 田
田村(藥理)	西 村	鷗 山	藤 森	小 野 田
井野(衛生)	久保(學生)	渡邊(病理)	笠 井	吉 田
小 田	守 屋	黒 川	井 出	上 塚
岡 田	土 居	・ 鈴 木	藤 山	